

『社長命令で、今日から俺の隣に住め』～秘密の同居は溺愛ルールだらけです～

「異動？」

朝のオフィスに自分の声がやけに間抜けに響いた。手に持っていたスマートフォンから顔を上げると、目の前に立つ上司の顔がにこやかな笑みを浮かべていて、その温度差に一瞬眩暈がする。総務部のフロアに朝の光が差し込んでいて、パソコンのファンの音と同僚たちがキーボードを叩く音が、遠くですっと続いていた。

「そう、今日付けで秘書課に異動。辞令はもう出てるから」

部長はにこにこと笑いながら、私の手元を指差した。そこにはついさっき部長から渡された一枚の紙がある。異動の内示。それも、総務部から社長室付きの秘書課へ。

「どうしてまた私が……」

「決裁が早い、仕事が丁寧、口が堅い。秘書課が欲しい人材って話だよ。それに、うちの社長が直々にお前を指名したそうだ」

社長が、直々に。

私は息を吞んでもう一度異動の内示を読み返した。確かにそこには、風長陽菜の名前と新しい所属とが、まるで当然のように並んでいた。

私が働いているのは、業界でも五指に入る IT 企業ハルカ・テクノロジーズ。本社ビルは地上四十八階建ての高層タワーで、最上階に社長室がある。私のようなただの社員が、その階に上がることは普通の仕事ではまずない。けれど、新卒で入社して三年目気が付けば私はいつも残業の多い部署で黙々と仕事をこなしていて、それが評価されたのか社内公募のプロジェクトにもいくつか当選していた。でも、それだけだ。顔の広い営業部のエースでもなければ、特別なコネがあるわけでもない。

「社長室へ行くのは、少し緊張するかもしれないが大丈夫。すぐ慣れるよ」

部長が私の肩を軽く叩いた。その手の温かさに、私はようやく現実を飲み込む。

「わかりました。本日から、出勤すればよろしいでしょうか」

「お、いい返事だ。今から行って社長に挨拶しなさい。秘書課の課長が待ってるから」

私は異動の内示を握りしめたまま部長に一礼して自分のデスクに戻った。デスクに置いてある観葉植物とマグカップ、それから引き出しの中身を少し片付ける。周りの同僚は何か察したようで、ちらちらとこちらを見ている。気にしていられなかった。

最上階に向かうエレベーターの中で私は壁に映る自分の姿を見つめた。無難なリクルートスーツ、黒のシンプルなヒール髪は、急いでまとめたので少しだけ後れ毛が落ちている。化粧は薄く、何の変哲もないどこにでもいる会社員。私の顔色は、自分で見るより緊張で青ざめていた。

エレベーターのドアが静かに開いた。そこは、静かで、空気が薄いように感じる。廊下の絨毯は厚く、足音が吸われて消えていく。壁には抽象画がかかり、花瓶に活けられた生花が空気を甘やかしていた。

受付にいた秘書課の女性が、私を案内するために立ち上がる。

「風長陽菜さんですね。お待ちしていました。社長室にご案内します」

「よろしくお願いいたします」

声が裏返りそうになるのを堪えて私は彼女の後についていく。社長室の前は、重厚な両開きの扉で彼女がノックをした。

「どうぞ」

低い声が、ドアの向こうから聞こえた。

その瞬間、背筋に震えが走った。初めて聞くはずなのに、どこかで聞いたような深く響く声。ドアが開き、私の前には巨大な執務室と窓から見える、この街のすべてがあつた。

「お連れしました。風長陽菜さんです」

秘書の女性が一步引くと私は執務机の向こうに座っている男性と目が合った。それが、長谷川玲王だった。黒い髪を後ろに流し切れ長の鋭い瞳を、私に向けている。スーツのジャケットを脱いで、

白いシャツの袖を巻いている。その首元から、ほんの少し淡いコロンの香りがするように感じた。

「お待ちしていました、風長さん。これから私の秘書として、仕事をしてもらう。よろしく頼む」

長谷川は立ち上がり、私に向かって手を差し伸べた。私はその手を、どうしていいかわからないままおずおずと握り返した。彼の手はとても大きくて、指の骨が硬く温かい。

「よろしくお願いします。まだ至らない点もあるかと思いますが、精一杯務めます」

「いい返事だ」

彼の瞳が、私の顔をじっと見据えている。私は初対面のはずの社長の視線が、何かを値踏みしているようにも何かを確かめているようにも感じられて、心拍数が上がった。

「では、早速だが、今日から住む場所はどうする？ 引っ越しの手配は？」

「え、住む……ですか？ 私は、今、自分のアパートが」

「まだ聞いていないのか」

長谷川は細いため息を吐いて、机の上の資料を軽く私に放ってよこした。それは、私の個人情報が記載されたファイルだった。住所、賃貸契約の有無勤務履歴。その隅に、長谷川の手書きの文字がある。

“今日から、俺の隣に住め”

字は乱暴で、でも力強い筆致。私の視界にその言葉が浸透していく。

「どういう、意味ですか」

「言葉通り。社長命令だ。今日から、私の住居の隣にある部屋に住んでもらう。用意はしてある。荷物は全て運ばせてある」

「荷物を……勝手にですか」

「それが必要だから。引越し業者は、君のアパートにはまだ行っていない。今手配した。君が仕事を終えて帰る頃には、全部移っている

だろう」

あまりに一方的で、あんまりな。私はファイルを握ったまま彼を見返すことしかできない。けれど、長谷川の目は本気で私の返事など最初から想定していない。

「待ってください。私のアパートには、まだ借家契約があつて引っ越す理由も、隣に住む理由もどうして私が……」

「風長、社長命令、意味、わかるな」

彼が一步、私の前に近づいてくる。その存在感に私の背中が壁を探す。だけど、社長室は広く私はその場に立ち尽くすことしかできない。

「君はこれから私の秘書として、二十四時間、行動を支える。誰にも知られず私の身辺を守り、そばにいる。そのためには隣に住んでいてもらうのが最善だ」

「二十四時間……」

「不満か」

「い、いいえ、不満ではなくただ、急すぎて、何も心の準備ができていないだけで」

「心の準備は、あとでしてくれ。今日の十九時車をビル正面につける。着替えの一つだけ持って、上がってこい」

「わかりました」

私は首を縦に振るしかなかった。それが、社長命令というものだからだ。サラリーマンである私に、拒否する自由などない。けれど胸の奥で、小さな疑問とそれから、熱い何かが音を立てて膨らんでいった。

——あの、長谷川玲王がどうして、私を選んだんだらう。

「では、行ってください。準備を」

長谷川の声は、退室の合図だった。私は一礼をし部屋を出た。

秘書課に戻り業務を覚えるのは、それからだった。パソコンを支給されメールアドレスを設定し、担当者からの引き継ぎを受ける。

私はただただ、今日の前にある仕事に集中しようとした。しかし、頭の中では長谷川の低い声と、あの“今日から俺の隣に住め”という文字が、何度もリピートされて手元が震える。

午後六時、仕事を終え、私は社員証を使ってビルを出た。正面には私を待っていた、黒いセダン。運転手が降りて後部座席のドアを開ける。私はお礼を言って乗り込んだ。車内には、あの香水の香りがした。長谷川が使っているものとは違う、もう少し軽い柑橘系の香り。けれど、緊張を解すほど私は冷静ではいられなかった。

「長谷川社長は、お戻りですか」

「社長はもう、お部屋に戻られています。じきに」

運転手は答え、車は静かに走り出した。街の灯りが流れていく。オフィス街から、高級住宅街へと向かう道をこの車は、間違いなく私の知らない場所へと進んでいく。

二十分ほどで車は静かな高級マンションの地下駐車場に停まった。地上では、四十八階建てのタワーマンションが夕闇の中にそびえている。私の住んでいたアパートは、その十分の一以下の年季が入った建物だ。

「風長様、こちらです」

ドライバーがエレベーターまで案内し、カードキーを渡してくれる。私はそのカードキーを握って、最上階のボタンを押した。エレベーターは滑らかに上がり、やがて静かに停止する。

廊下は、まるでホテルのように静かで私の足音だけがひそやかに響く。部屋番号は“A”。隣の扉は“B”。ドアノブの材質が、私の部屋と同じであることがわかる。私は深呼吸をして、部屋の鍵を開けた。

中は、私の家具で、全部埋められていた。見覚えのある本棚私の服が入ったワードローブ、古いソファ—小さなキッチンの食器。アパートにあった私の私物が、不自然にでも整然と、この広い部屋の中に配置されている。まるで、最初からここに住んでいたように。

「引っ越し、完了してる……本当に」

言葉が漏れる。

私は、部屋の中央に立って静かに息を吐いた。私の家が、私のいない間にここに“移動”している。私の領域は、たった数時間で社長

の隣の部屋に変わっていた。

シャワーを浴びてベッドに座る。まだ、夕食も食べていない。けれど食欲がない。携帯を見ると、会社から届いた明日の予定メール。そして、別の宛先から一通のメッセージ。

“部屋に慣れたら隣に来て。鍵は開いてる”

差出人は、長谷川玲王だった。

私は、その言葉を見つめてしばらく身動きができなかった。来い、という。今夜。部屋に。今から。自分が今この部屋にすることが、どういう意味を持つのか。身動きができなかった。

でも、社長命令だ。私は部屋着に近いカーディガンを羽織って、足をすり自分の部屋を出た。隣の部屋の前で、もう一度深く深呼吸をしてから、ドアノブに手を置いた。

鍵は、開いていた。

「失礼します」

玄関から入るとその部屋は、私の部屋よりもさらに広くて黒と茶で整えられた内装が、高級ホテルのようだった。靴を脱いで廊下を進む。

「入って」

奥から、長谷川の声がした。

私は、リビングルームの入り口に立った。そこには、長谷川がソファに座りワイングラスを傾けていた。ジャケットは脱ぎ、シャツの襟元を開け袖をまくっている。無精のように見えて、仕草のすべてが絵になる。

「座って」

「はい」

私は、彼の向かいのソファに、浅く腰を掛けた。足を揃え手を膝に置く。長谷川は、私の姿をしばらく見ていたがやがて、静かに笑った。

「緊張しているな」

「あたりまえです。いきなりすぎます」

「まあ、そうだろうな。だが風長。君にだけは、最初から言っておくべきことがある」

長谷川は立ち上がり、私の隣に移動して座り直した。ソファのスプリングが沈む。距離は、五十センチもない。彼の腰が私の腰に触れそうになる。

「君がここに住むことは、誰にも言うな。会社の者にも家族にも、友人にも。ここは秘密だ。俺と君の秘密の同居だ」

「秘密の、」

「そうだ。いいか。このマンションのこの階は、俺と君の二部屋だけ。誰にも見つからないように、深夜と早朝の出入りは控えろ。買い物も今までの生活リズムのままするな。……わかるな」

「はい。守ります。けど、なぜ私を……」

「風長、君は、俺が欲しい人だ。仕事でもプライベートでも。俺の